

[論文]

「生きづらさ」をパフォーマンスする人々の つながりを形成する戦略

—共通性による共感と障害の価値転換を越えて—

杉本洋（新潟医療福祉大学健康科学部看護学科）

抄録

本研究の目的は、「生きづらさ」を抱える人々がいかなる戦略でもって、交渉や対立といった意味合いを含むつながりを形成するのかを明らかにすることである。その中でも特に、当事者の実践にみられる共通性による共感や、障害の価値転換に価値をおく戦略が内包する当事者内部の多様性や、当事者の権威化といった課題に対する戦略を探索、考察した。研究フィールドとなる活動は病气や障害、ひきこもりなどの当事者による自作の詩の朗読パフォーマンスなどを行っている活動である。その実践からは、参集の基準を曖昧なままに調節すること、自らの負の姿を示していくこと、差異を強調すること、多様な文脈と参集の形態をとること、といった戦略が見いだされ、そうした戦略が、共通性の狭間に取り残されがちな人々や、病气や障害の価値を転換することが困難な人々など、従来つながりの形成が困難であった人々のつながりの形成を促しうることが考えられた。

Key Word

生きづらさ、パフォーマンス、つながり、戦略

1. 背景

本研究は、「生きづらさ」を抱える人々が、自作詩の朗読などのパフォーマンスを行うという特徴的な実践の検討を通して、当事者によるつながりを形成する戦略を明らかにすることを目的としている。なお、ここでいう「当事者」とは、「不利益を受ける主体[星加 2012: 11]」、「ニーズの帰属主体[中西・上野 2003:9]」という形で用いている。たとえば、明確に線引きは難しいものの、病气や障害を有している人々、またはその家族などが該当するかもしれないし、本稿においては明確な疾患名ではなくとも、就労問題や、貧困問題等を含む「生きづらさ」を抱える人々も当事者ととらえられる。また、「つながり」とは、実践を構成するアクターの間を指している。これは、無機的な関係性よりも幅広い意味合いを持たせるものとして[小池 2012]、当事者同士の内部の関係性や、非当事者などの外部の人々や組織との対立・交渉・協力といった多様な関係を包含したものとして扱っている。そして、「戦略」とは当事者という「主体」による、「力関係の計算（または操作）[Certeau 1980=1987:100]」を指しており、具体的にはいかにして対立・交渉・協力といった意味合いを有するつながりを形成していくのか、を表している。これは、意識的になされるもののみを示すのみならず、言葉として表すことが困難な暗黙知[Polanyi

1966=2003; 大串 2007]として実践の中に埋め込まれているものを含んでいる。

病気や障害はそれらの当事者の孤立を招きやすく、社会参加が妨げられることは、切実な問題となる。そうした中、病気や障害を抱える当事者は様々な実践を通して、他者とのつながりを形成してきた。中でもセルフヘルプグループの実践は古くからなされ、同じ病気や障害のある人々同士での体験的知識の共有や共感をもとに当事者はつながり、孤立感を解消してきたことが示されている [Katz 1993=1997; 平野 1995 など]。また、当事者による芸術活動は、負に捉えられてきた病気や障害を逆に美的なものに転換することを志向し [倉本 2010; 西倉 2010 など]、時に当事者ならではの文化の確立を目指してきた [杉野 1997; 木村・市田 1996; 自立生活センター協議会 2001]。こうした共通性、共感、価値転換を重視する戦略に基づくつながりは当事者の孤立を解消し、自尊心を回復させるうえで大きな貢献をしてきた。

しかしながら、共通性の強調と価値転換を志す実践に対して、いくつかの問題も提起されている。たとえばグループ内の差異に係る問題、つまりはセルフヘルプグループを含むコミュニティのグループ内の同調圧力や過剰適応、グループ内部の排除といった課題が挙げられる。これらは、セルフヘルプグループなどの文脈で語られることもあれば、一般的につながりやコミュニティの問題として語られる場合もある [綾屋・熊谷 2010; 金子・玉村ほか 2009]。2点目は、当事者の権威化にかかわる問題が挙げられる。医療や福祉の文脈において、専門家の権威化が問題視されてきたが [Illich 1979=1998; Freidson 1970=1992]、近年は、同様に当事者の経験が権威化されることや、当事者にしかわからないといった当事者幻想などへの危惧が言及されている [豊田 1998; 山田 1999; 向谷地 2009]。

そうした中、現在世間で「生きづらさ」の問題が語られている。「生きづらさ」は単に明確な疾患に収まらない、定義するのは困難な概念であり [山下 2010]、時にマイノリティの問題として語られ、アダルトチルドレンや精神疾患、ひきこもりなどの文脈で用いられやすい言葉となっている。そして、単に生物学的な疾患ではなく「『社会』や『環境』や『時代』との関係 [藤野 2007: 46]」でとらえられ、ある時には心の問題としてとらえられ、ある時には社会の問題としてとらえられる [香山・上野ほか 2010; 雨宮・萱野 2008]。

「生きづらさ」という多様な広がりを持ち、単に個人的な問題ならず、広く社会や時代的背景を踏まえた概念で参集する人々の実践は、従来のセルフヘルプグループなどの実践とは異なるつながりや戦略が見出されることが考えられる。本研究では、意義深い問題提起はなされているものの、明らかにされていないグループ内の差異や当事者の権威化という問題に対する当事者のつながりや戦略を考察することを目的とし、当事者の実践における理論的知見を求めることを試みる。

2. 方法

本研究は、病気や障害をパフォーマンスで表現する実践へのフィールドワークを元にしたデータを用いている。具体的なフィールドは、病気やひきこもり、生きづらさの経験をパフォーマンスする、「こわれ者の祭典」と「K-BOX」という活動であり、2008年より

現在まで、120日程度に渡りフィールドワークを行った。具体的には、表現活動の代表者をはじめ、関係者に調査許可を得、観客として、また、ボランティアスタッフとして活動に参画した。特にスタッフとして活動に参画することにより、単にパフォーマンスにて表れる事象のみではなく、活動の運営上の機微など活動の理解につながるデータの収集が可能となった。データには、イベントの観察や参与観察、インフォーマルなインタビューなどにより得られたデータに加え、活動にかかわる印刷媒体、著作物、インターネット上の情報など、各種ドキュメントを含めた多様な情報を用いた。分析では、明らかにされている共通性による共感によるつながりを形成する戦略、当事者の価値転換を試みることによって対外的に働きかける戦略を相対視し、見いだされた知見と比較した。そしてその上でつながりを形成する上での新たな戦略のあり方を検討した。

なお、本研究で採用している長期のフィールドワークに基づくデータの収集に基づいて理論的知見を深める手法は、文化人類学的な手法である。これは、内部からの視点、全体論的な観点を重視し人々をとりまく多様な社会的背景を踏まえて分析するものであり、本研究でこのような手法を用いたのは、単にパフォーマンスの場で語られる内容や客観的な実態のみを分析対象とするのではなく、実践にかかわる数々の情報を分析対象とし、実践が有する意味や機微をとらえ、包括的に、実践の中に埋め込まれている当事者の戦略を明らかにし、理論的知見を生み出すことを意図していることによる。

3. 表現活動の概要

3-1. こわれ者の祭典

本研究のフィールドのひとつとなる「こわれ者の祭典」とは、病気や障害を有する人々によるパフォーマンス活動であり、行われるイベントやパフォーマンス活動を行う団体を指す。イベント時に配布されるフライヤーや団体ホームページなどにおいて、たとえば以下のように紹介される。

- 「病気」の体験発表 & パフォーマンスイベント
(2011年6月19日公演用フライヤーなど)(図1)。
- 「病気でどう苦しみ、そこからどう回復したか」をユーモアを交えたトークと、その病気に関するパフォーマンスで盛り上げる。
- 現在まで、アルコール依存症、ノイローゼ、うつ、幻聴幻覚、過食症、引きこもり、脳性まひ、リストカット、自殺未遂、パニック障害、性同一性障害、などの体験者が出演(以上フライヤー2012年9月22日公演用などより抜粋)



図1 こわれ者の祭典フライヤー
(2011年6月19日公演用)

歴史的には、10年を越える期間にわたって活動が継続されており、定期的な東京、新潟での公演（それぞれ年に2回ずつ）がなされている。メンバーは代表の月乃さんをはじめ、4人ほど（2013年時点）で構成され、年齢は、20代から40代にまたがっている。メンバーはアルコール依存症や摂食障害などの病気や障害を有している¹。

イベントはパフォーマンスと病気などの経験のトークで主に構成される。パフォーマンスは、自作詩の朗読パフォーマンスが主流を占めるが、パフォーマンスの内容は自作詩の朗読以外にも、お笑いや歌や映像など多岐に渡っている。パフォーマンスはフライヤーには以下のように紹介される。

- アルコール依存症自慢。引きこもり自慢。月乃光司による絶叫朗読
- 摂食障害自慢。引きこもり自慢。Kaccoによる女装パフォーマンス
- 強迫行為自慢・アイコによるパフォーマンス
- 脳性マヒブラザーズ (DAIGO& 周佐則雄)によるお笑い
- 統合失調症自慢・YOPPYによるメッセージソング
(以上 2010年12月5日新潟公演用フライヤーより)
- アダルトチルドレン自慢・大久保長男による自作映画
(2012年1月8日東京公演用フライヤーより)

パフォーマンスは、特に朗読などにあらわされるように、自らの経験を表現する機会となっている。詩の朗読などの表現は、イベント会場のステージ上で不特定多数に向かって発せられる（写真1）。朗読される詩の一部を以下に挙げる。



写真1 こわれ者の祭典新潟公演（2012年2月12日）

■月乃さんの例

閉鎖病棟 鉄格子を越して僕が見ているこの空と同じ空を見上げる人々 僕の仲間だ
仲間 仲間がいれば僕はきっと生きていける
仲間で傷をなめ合って 傷口をほじくりまわして 傷口を突付き合って
流血して大流血
血と汗と涙と鼻水とヨダレと生き恥をぶざまに垂れ流しながらも生き抜いていこう
仲間！（2012年9月22日パフォーマンスより一部）

■ Kacco さんの例

躁鬱病 過食症 拒食症 パニック障害に苦しんでいた Kacco はね
周囲の人にどう思われているんだろうってとっても気になって
怖くて 外に出れずに引きこもっていたんだよ (2012年9月22日パフォーマンスより一部)

■ アイコさんの例

無駄に長い休み時間を潰すために 遠くの校舎まで水を飲みに行ったこと
水道はいつも鉄の臭いがして 窓の外から笑い声がして
でも ほかにやることもなかったし 帰る場所もなかったし
家族はいがみ合うものだったし
家族は学校よりももっともっともって戦場だったし (2012年9月22日パフォーマンスより一部)

公演で表現されるものには、パフォーマンスと共にトークがある。トークはイベントの進行に従って、自己の紹介、自分の経験、観客に向けてのメッセージなどが語られる。語られる内容の軸は「病気でどう苦しみ、そこからどう回復したか」(2011年6月19日公演用フライヤーなどより)となる。回復のきっかけとしては、自助グループとの出会いであったり(月乃さん)、どん底の時に舞い込んできたイラストの依頼であったり(Kaccoさん)することが語られる。苦しんだ経験は、リストカットやひきこもり、過食や家庭内暴力といった経験から、会社や学校、地域での人間関係のストレスといったものなどにわたっている。経験のトークはたとえば、以下の Kacco さんの例のように語られる。

Kacco: 私、摂食障害あるんですよ。で、過食症と拒食症っていううちの過食症のエピソードで、
ごはんを家族が寝静まった深夜に1升ぐらい食べちゃうんですけど、それまでは家族が
寝静まってから食べてたんだけど、もうどうしてもやりきれなくて、で家族が見てる前で。

松井(司会)²: やった。

Kacco: グワーツとやって、それでやっと、ああ、自分の子どもは普通じゃないんだ、やっと病気だ
って認めてもらって肩の荷が下りたんです。(2011年6月19日イベント時のトークより)

また、イベントにおいては、時に著名人のゲストが招かれ、出演する³。こわれ者の祭典は公演が終了した後に打ち上げ交流会として観客と表現者が交流する場が設けられている。新潟公演では20名程度が参加し、出席者も自己紹介したり、時にパフォーマンスを行ったりと、イベント時のステージ上の表現者と観客という立場にとどまらないテーブルや酒を囲んだ時間が過ごされる。

3-2.K-BOX

本研究のもうひとつのフィールドである K-BOX は、副代表としてこわれ者の祭典にも深くかかわっている Kacco さんが運営している活動である。定期的にライブ活動を行い、ひきこもりや、心の病などの経験を有する人々が集まり、ライブ活動などを行っている。「心の病を抱えた方やひきこもりの方などがプロデュースを受けてアーティストやタレントとして所属しているプロダクション (K-BOX 紹介フライヤーより引用)」と説明される。

ミュージック部門、パフォーマンス部門、アート部門で構成され、それぞれ音楽活動、詩の朗読などの活動、イラストなどのアート活動を行っている。メンバーは20名程度であり、比較的流動的であり、長期間にわたり活動を行っているメンバーもいれば、最近活動を始める人もいれば、活動を休止する人もいる。

メンバーの活動を行うきっかけとしては、Kaccoさんが相談員をしている病院でKaccoさんと知り合うという形をとったり、イベントを見に来て、興味を持ち、活動にアクセスしたりするパターンが一定割合を占めている。K-BOXの活動は、定期的に行われるライブ活動や、毎週行われる練習の場であるレッスンが中心となる。ライブは、隔月の定例ライブと夏と冬に行われるゲストを招いたスペシャルライブ、その他朗読や音楽に特化した企画ライブなどがある。ライブは複数のメンバーによる音楽や詩の朗読などのパフォーマンスとトークが中心となり、その形態はこわれ者の祭典と似ている。しかしながら、表現のされ方は、自らの経験を直接的に表現するものもあれば、音楽（ロックやジャズピアノ演奏など）やイラストなど、病気色が濃いものではなく、演奏などを純粹に楽しむものも多い（写真2）。



写真2 K-BOXライブ (2012年10月8日)

K-BOXは、Kaccoさんのリーダーシップのもと、プロダクションとして様々な活動を展開している。定期的なライブやレッスンのみならず、地域の福祉イベントや祭などでパフォーマンスをすることもあれば（2011年10月10日など）、他にもテレビ番組の企画へのメンバーの出演や、自らがパフォーマンスを披露するのみならず、教育機関の校歌やイベントのテーマソングを創り、提供するといった活動に至るまで⁴、活動の幅は広くわたっている。

K-BOXは、こわれ者の祭典の副代表であるKaccoさんが運営していたり、K-BOXのメンバーが、こわれ者の祭典に出演する機会もあるなど、こわれ者の祭典と決して無関係ではない。しかしながら、パフォーマンスも病気の体験が詩などで語られるスタイルで共通したところもあるが、病気を越えたパフォーマンスを活発に展開している点やプロダクションとしての運営のあり方、メンバー間のつながり方などにおいて、こわれ者の祭典とは異なる点も多く、K-BOXは実態的にも内容的にもこわれ者の祭典とは別個の独立した活動となっている。

3-3. 表現者の個々の活動

以上、フィールドとなる活動の概略を示した。それらに加えて、団体としての活動以外にも各々の組織のメンバーは個々に、多様な活動を行っている。個々の活動の代表的なものに挙げられるものとしては、個々で企画するライブ活動やパフォーマンス活動がある。たとえばこわれ者の祭典の代表の月乃さんは数多くの活動を行っており、自らが主催して自殺予防や生きづらさのイベント、さらにはサブカルチャーイベントといった活動（2013年7月13日ポエトリーリーディング in サブカルチャーなど）などを行っている。また、他の団体から招かれたり依頼されたりする形で講演やパフォーマンスが行われることもある。月乃さんはじめメンバーは時に、学校や自治体主催の講演なども行い、Kaccoさんは新潟県内で定期的に講演会を行っている。K-BOXのメンバーなどが各種シンポジウムのコーディネーターやパネリストなどを務める場合もある（2010年8月1日若者の自立支援を考えるシンポジウムなど）。

それぞれの団体のメンバーは、日常は会社員などをして暮らしている人が多いが、Kaccoさんのように、イラストやプロダクションの運営、講演会活動などの活動を日常的にしている人もいる。また、脳性マヒブラザーズのように、お笑いなどの活動を専属で行っている人もいる。

4. 「生きづらさ」を表現する人々のつながりを形成する戦略

以上、生きづらさを表現する人々の実践の概要を示してきた。以下に、そうした実践から見出される「生きづらさ」を表現する人々の戦略について、特に、多様性がある中でのつながり、当事者の権威化を回避しながらの外部とのつながりを形成する上での戦略について考察する。

4-1. 「病氣」を基盤にしながらなされる「生きづらさ」の調節

「生きづらさ」を表現する活動は、「生きづらさ共同体」と表されるつながりをつくることを意識している。それはたとえば以下のように表現される。

月乃：そうですね。私も27歳ぐらいのとき病院に入院して、私は自分で死にたいと思っていたけど、何か「生きづらさ共同体」みたいな、今日の集まりもそうですけど、そこにたまたまつながることによって、皆さんから命をもらっているんで。（2009年12月23日こわれ者の祭典）

そして、広がりを持たせた「生きづらさ」の枠でもって、仲間としてつながることを志している。月乃さんは以下のような文言を含む「仲間」という詩を創っている。

僕と同じ匂いを感じる人たち
それは僕の仲間だ
僕と同じ生きづらさを持つ人たち
それは僕の仲間だ。 （月乃光司作「仲間」より）

参集の基準は「匂い」のような感覚的なものであり、客観的な診断基準などに基づくようなものではない。イベントで語られる内容は幅広く、精神疾患などの病気のことから、ひきこもりのような状態像、モテないこと、いじめ、職場のストレス、など多様に渡る。個別の事象についての苦悩の程度は状況や人によって異なると思われるが、その中で多様で主観的な「生きづらさ」が設定される中で活動が展開される。しかしながら、設定される「生きづらさ」が、あらゆる生きづらさを指しているのではなく、「病気」などの基盤を維持した形で調節されているように見受けられる。それは、「病気」がイベントの内容やテーマには通底しており、「病気だよ！全員集合！」という掛け声が毎回こわれ者の祭典時において発せられること、メンバーが特殊であることが時に強調されることなどに表れる。たとえば、こわれ者の祭典においては、「健常者も、障害者も関係なく、みんなどっかかしらこわれ者だよねって意味合い」があることが司会の江口さんにより語られ、月乃さんはそれに対し、「そうですね。人類みなこわれ者ってことで。ただ、まったくそれで人間みんな平等なんですけど」と同意しつつ、「一見こういう舞台上上がると、普通な感じですけど」『キャラじゃないんです。本物なんです。それは伝えたいと思います。』と、当事者としての特殊性が強調される（2013年1月13日イベントより）。どの程度や内容が「生きづらさ」であり「こわれ者」であるのかは明示されないが、その範囲は曖昧なままに据え置かれ、病気の軸を有しながら参集はなされている。

セルフヘルプグループや障害者運動などの活動においては、参集の基準は特定の疾患や経験などが多く、その枠内に入る人と入らない人との基準が明確なところがあった。それゆえに、当事者同士の凝集力が高まり、結束していくことが可能となる一方、その枠内に入らない人を排除してしまうことになりかねない危険を有していた。いわゆる当事者のつながりは、当事者同士と共に外部ともつながるが、それは対立的な形であれ、協力関係であれ、当事者とある程度明確に区分された形できり上げられてきた。しかしながら、病気などの当事者性を一定割合保持しつつ「生きづらさ」でつながる人々は、当事者の枠組み自体を境界不明瞭なものとして再構築し、多様なアクターを巻き込む形をなしている。こうした実践は、従来非当事者としてみなされ、みなしてきた人々自身に当事者性を付与し、単純な対立関係や協力関係ではなく、当事者—非当事者の重なり合うところにおいて非当事者を巻き込む形でのつながりを形成している。「生きづらさ」という主観的であいまいな概念でもって参集することに価値をおく実践は、従来非当事者とみなされてきた人々を巻き込みつつ、多様な経験の中での共感と、社会変革的な要素を持つひとつの当事者による実践の形態としての可能性を開くあり方を提示している。

本研究において明らかにされたことは、疾患名等で括られる狭義の「当事者」の枠組みにおいては、内部の多様性にかんする問題や、その枠組みに入りきらない人々が阻害される状況がある中で、当事者概念を曖昧なままに再形成する戦略がみられるということである。医療の専門家など他者から与えられた客観的な枠組みのみではなく、自ら行う実践の中で当事者—非当事者の境界が調整され、その境界は「人類皆こわれ者」という立場と当事者の特殊性の合間に位置している。「人類皆こわれ者」というあらゆる人々にとって普遍的な立場といわれる当事者の特殊性を強調する立場は矛盾するが、矛盾を解決しないままにすることは、つながりの形成において妨げになるというよりもむしろ、新たなつながりを構築する上での当事者の戦略となるものであると考えられる。

4-2. 負の表現

当事者による活動のひとつの方向性には、自らの不当に低くみられてきた能力や価値を転換させ強調するあり方が存在する。しかしながら、本フィールドにみられる活動はむしろ、自らの「ダメな部分」を能動的に表現していく姿が多々見受けられる。

弱さを含む自らのありのままの経験を語りあい、当事者同士でつながるあり方はセルフヘルプグループなどにおいてみられるところである。そして、弱さを表すことはつながりをつくる上で重要な要素であり、弱さは弱いからこそその力を有することが考察されている [中村・金子 1999; 松岡 2005 など]。しかしながら、本フィールドとなる表現活動にて表されるのは、パフォーマンスを通した迫真的な負の表現であり、それは弱さとはある意味対極的にある強さを感じさせる。たとえば、以下のような内容が詩に表現される。

いじめられて、バカにされて、無視されて、笑われても、僕たちは
死ななかった、死ななかった、死ななかった。
僕たちはサバイバー (月乃光司作「僕はサバイバー」より)

サバイバーとの表現は、虐待、がん、心的外傷などにおいて用いられており [Evans and Sullivan 1995=2007; Herman 1992=1999 など]、「患者」や「被害者」よりも、被害を受けてきた人の回復過程や生き延びてきた強さが強調される語感を有している。生存者との自己規定は、そうした生き延びてきた強さが表されるものであり、負の表現は、同じように生きづらさを有していることの共感と共に、生存していく強さをそれぞれが有していることを強調するような意味合いを持つと考えられる。これは、障害や病気の価値転換ではなく、弱さを生き延びていくことの意義を示しているように思われる。また、表現者は以下のように表現する。

僕の情けない生き残ってきた人生体験を聞いた高校生から手紙が来た。
その手紙にはこう書かれてあった。
あなたの話を聞いて、僕はとても安心しました。
こんな人でも社会復帰してるんですね。
こんなあなたでも生き残ってきたんですね。
僕はとても安心しました。
(2009年7月12日公演時パフォーマンスなど、月乃光司作「僕はサバイバー」より)

「現実の世界で、傷つきながら、恥をかきながら、歩いていこう。みっともなく生きよう。ぶざまに生きていこう。人に笑われて生きていこう [月乃 2006 : 10]。」「かっこわるく生きていきたい [月乃 2009 : 11]」

これらが示していることは、価値を転換し問題を克服してきた強さを表現しているのではなく、ダメな自分のままに生き延びていること、「こんな人でも生きている」ことを表現する戦略である。

なお、こわれ者の祭典にしても K-BOX にしても、その時々イベントの性質にもよる

が、個人の病気や苦悩の経験を「笑う」ことが特徴の一つとなっている。言語障害のある表現者に「何を言っているのかわからない」といい笑いを誘い、摂食障害のある人が「どれだけ大量に食べてきたか」を語ることで、笑いを誘っている。笑いあうことや貶めあうような立場は、特に、こわれ者の祭典は、歴史的にも運営的にもお笑い集団 NAMARA とのつながりが深いことが関係することが考えられ、こわれ者の祭典の司会を務める NAMARA 代表の江口さんは、ステージ上で、当事者の表現者をいじり、笑いをとるスタイルを形作る。このようなスタイルは、一定の批判も浴びるも、月乃さんは、江口さんの毒の入れ方を評価し [月乃 2011a]、活動を共に継続して行っている。

「こんな人でも生きていける」ことを表現することは、自らのみじめさなどの負の部分強調して他者を勇気づけるあり方ととらえられる。かっこよく、能力があり、笑われないように生きることに価値をおくのではなく、その真逆の属性に価値をおくことは、表現活動の大きな特徴であり、こうした価値観の表現は、障害などの属性に価値を見いだせず、孤立しがちな人々のつながりを形成することに寄与していると考えられる。

負を表現することの意味は、「生きづらさ」という枠組みの中で、多様な経験や疾患枠組みが織り交じる中、負の側面を抱えつつ生きていくことを示すことにより「生存」が顕在化させられることにあると考えられる。また、当事者の権威化を回避し、価値転換をなしえない人々にとってのつながりを形成する道筋が示されることも負を表現することの意味であることが考えられる。

4-3. 差異の強調

経験をパフォーマンスする本活動は、分かり合えることを唯一の価値として展開されているのでは必ずしもなく、経験や思いに差異があることを伝えることが意識されているように思われる。こわれ者の祭典においては、表現者も身体障害と精神障害もあれば、同じ精神障害といえども、それぞれの疾患や体験は異なり、それらの違いをトークによって表されることがある。同じ精神疾患であっても、その疾患名は異なる中、非当事者の立場としての司会者が表現者の経験を聞き出すのみならず、当事者である表現者間で好奇心をもちながら、他の表現者の話を引き出していくような展開も多々見受けられる。また、パフォーマンスとして身体障害と精神障害が対立するような展開がなされる場合もあり、たとえば、身体障害者の立場として、DAIGOさんは以下のように挑戦的な立場をとる。

DAIGO：いやあ、ぶっ飛ばしたいのはねえ、五体満足なくせに「生きづらい」とか

「どうしていいかわからない」とか、そういうばかな精神障害者ですよ。

DAIGO：あのねえ、俺なんてね、歩けない、しゃべれないっていう脳性マヒなんですけど、

こいつら（精神障害者を指して）、普通に歩いてしゃべれるのに、生きづらいとか、死にたいとか（笑）。（2011年7月17日こわれ者の祭典）

こうした挑戦的な表現は、パフォーマンスとして場を盛り上げるためのものではある。そしてパフォーマンスで行われるものであるにせよ、表現者間の差異を浮き彫りにする。そして、そうした差異がある中においても実践は形成され、パフォーマンスとしての活動の中で表現者同士貶めあいながらも、決して、関係性が悪化するわけではなく、活動が継

続されていく。

もちろん本稿で記述する生きづらさイベントにおいて、共感はつながりを形成する上でも、自己否定に陥った人々が肯定的なアイデンティティを獲得する上でも重要なことに違いはなく、本稿で示している差異の強調は、決して共感の重要性を否定するものではない。特にアイコさんは、以下のような詩をつくり、「同じだね」と共感することの重要性を表現する。

「同じだね」ってそう言ってくれたときに

誰かの苦しみの中に自分の過去を少し重ねたときに

「ああ それ分かるわ」って笑ったときに

苦しんできてよかったのかもしれないと ほんの少しだけ思う瞬間があるんです

そのために生きてる (2012年9月22日こわれ者の祭典など)

このように、表現活動の価値観として「共感」を重視していることは確かなことである。しかしながら、当事者の戦略としての可能性を考察する上で、多様な生きづらさを抱えている人々の差異を強調する実践からは、共感を元にしたものに限らず、差異を強調するからこそ生じるつながりが存在すること、特に分かり合えるという幻想を超えて、分かり合えないままにつながるうえで、差異を示すことが意義を有するものであることが示唆される。

なぜ差異が強調される中でつながりがつくられるのかについては、たとえば、差異があっても、生きづらさという観点において、共通性による凝集力が働くことも考えられれば、自身の負の側面を表現するあり方にみられるように、差異が表現される中で負の側面が強調されることが、むしろ表現者が重視する「生存」を強調する上で有益であることなどが考えられる。差異を強調することで、パフォーマンスを創り上げるという共通の目的に向かうことができるからかもしれない。

もっとも、当事者同士が笑いあい、貶めあう中での当事者のアイデンティティ形成や、共有される価値観については多くの議論の余地を残すところである。しかしながら、本研究の視座である権威化の観点からも、挑戦的に表現者同士を貶めあうパフォーマンスや、共通性をもちながらも差異ある多様な人々が共に実践を繰り広げることは、負の表現と同様に、当事者の権威化を回避する戦略として意味を有するものであることが考えられる。

4-4. 文脈の越境と参加の形態の多様さ

こわれ者の祭典やK-BOXは多様な活動の形態をとっている。特にK-BOXはメンバーの人数がこわれ者の祭典と比して多いこともあり、毎回のよう活動に参画し、ステージに立つ人もいれば、そうではない人もいる。また、同じような精神疾患や障害を経験しながら、表現者の立場をとる人もいれば、スタッフとしての活動を主としているメンバーもいる。また、本フィールドである活動は、パフォーマンスイベントであることから、観客としての人々の参加がある。生きづらさを抱える人々としては、表現者も観客も同様であり、観客もまた活動への参加者として重要な意味を有してくる。打ち上げ交流会のような観客との密接なつながりをつくりうる場を設定するこわれ者の祭典や、観客としての参加者も20名程度の規模のことが多いK-BOXは、顔と顔の見える観客とのつながりを重視

している。こわれ者の祭典の打ち上げ交流会については、メンバーのアイコさんが「お客さん同士もつながれるし、パフォーマーもステージ上の違った人ではなく同じなんだというメッセージを発することのできる場」と述べるように（2011年2月5日こわれ者打ち合わせ時）、観客を交えた打ち上げ交流会をイベントに欠かすことのできない取り組みとして重要視されている。そして打ち上げ交流会では、観客の自己紹介もなされるが、そうした場で観客は自己の疾患や経験を語り、観客の人々の多くも精神疾患やひきこもりなどの経験を有していることがうかがえ、表現者、観客を包摂したつながりが形成されている。

そして、観客の参加の仕方においても様々な形態が見受けられる。たとえばこわれ者の祭典において公演を見に来るのみの人もいれば、打ち上げ交流会まで参加する人もいる。また、こわれ者の祭典や月乃さんの行うイベントのいくつかなどはインターネット上での動画配信を行っており、イベントの会場にいなくとも、観客は動画を見ることによって活動にかかわることができるようになっている。また、活動が、パフォーマンスとして、自助グループ的な活動として、芸術活動として、サブカルチャーイベントとして、と多様な文脈にその特性が跨っていることが特徴となっており、観客は、パフォーマンスを観に来る人もいれば、病気の体験を聞きに来る人、ゲストの話聞きに来る人、など多様な志向でもって活動に参集している。

一般的な自助グループでは、文脈が固定化された（たとえば福祉的な観点として）、参加の形態が画一的な（閉鎖的な環境など）状況の元で行われることが多い。そして、そうした場であるからこそ苦悩が共有され、共感を基にしたつながりが生み出されている。こうした文脈や参加の画一性は、安全を確保し、当事者同士がつながりをつくる上で非常に有用である。しかしながら、画一性の高い同一文脈内での参集は、多様な生きづらさを抱える人々の参集の場とはなりにくいかもしれない。福祉的なイベントでもありながら、文脈をパフォーマンスやサブカルチャーの分野まで越境し、活動を展開する考え方やあり方は、いわゆる従来の当事者と非当事者を区分した参集のあり方、また当事者と異なるものとして対立、もしくは協力関係にあった他者、他組織を包摂したつながりのあり方に開かれる可能性を示している。

5. 結論

本研究では、「生きづらさ」を抱える人々が、自作詩の朗読などのパフォーマンスを行うという特徴的な実践の検討を通して、人々や組織との対立や交渉といった点まで含んだ広い意味を持つ「つながり」という観点から病気や障害を有する当事者のパフォーマンスの戦略を考察した。その結果、①必ずしもグループ内部の共通性や非当事者との差異を前提としたつながりではなく、「生きづらさ」という曖昧な枠組みを設定することにより参集の基準を調節する、②価値転換ではなく、負の側面を表象することにより、生存を顕在化させる、③共通性のみではなく時に差異を強調する、④多様な文脈の越境と参加の形態をとる、ことが当事者の戦略として見出され、そうした戦略によって当事者間のつながり、また、当事者—非当事者の枠組みが再構成されたつながりが形成されることを示してきた。これらは、当事者の活動によるつながりが、必ずしも明確な共通性を求めるのではなく、かといって誰もが同じだという言説を構築するのでもなく、むしろ参集の基準において矛

盾を抱えたまま基準を曖昧に据え置く価値観がつながりの形成を促すこと、病気や障害といったものの価値を見出し、病気や障害を価値あるものとして主張するというよりは、負の側面を負のままに表象していくということが、弱さをもとにしたつながりをつくり、同時に病気や障害の価値ではなく生存していることの価値を顕在化させていること、共通性で参集しているように見える人々が実は多様な経験を有していることにとどまらず、むしろ、差異を強調することによって当事者間、もしくは非当事者である外部とのつながりが形成されうる可能性が見いだせること、閉じられた画一的な文脈と参加の形態のみが孤立しがちな人々のつながりをつくりだすのみならず、文脈の越境や多様な参加の形態をとることによって従来共通性の狭間に取り残されてきた人々のつながりが形成されうること、といった意味合いを有することを示している。

そして、「生きづらさ」で参集し、パフォーマンスする人々の、多様性や自らの負の側面の表象に価値をおく戦略的実践は、当事者の実践において、グループ内部の共通性やグループ外との差異を前提としてきたつながりの困難さや当事者の権威化への対応、特に共通性を基盤とした既存のグループの参集基準に合致しない人々のつながり、自らの病気や障害などの属性に価値を見出すことが困難な人のつながりの形成をなす戦略となりうるものが考えられた。

6. 今後の課題

本稿においては、「生きづらさ」を抱える人々のつながりを検討し、従来の当事者による実践が抱える多様性や権威化の問題に対する新たな当事者の戦略を提示してきたが、多くの限界、課題を残しており、それらを以下に示す。

1点目、本研究の中で明らかにされつつあることに、当事者の活動において様々な矛盾する立場やその共存のための実践があることがあり、それらの検討が求められる。本研究でも言及した、生きづらさの普遍性と当事者としての特殊性を強調するあり方を含め、負であることを強調することと自尊心を獲得していくこととの関係、差異を強調することと共通性を重視すること、閉鎖的で安全な関係性と開かれた関係性の共存、といった点、さらにはたとえば、本稿で言及することは少なかったものの、パフォーマンスの質を追求する立場と素人らしさを強調する経験のリアリティを重視する立場といった矛盾する立場の共存については検討を深める余地を多く残している。

2点目、実践を静的な立場ではなく、動的な関係性の中での検討を深める余地を本研究は残している。つまりは、当事者による表現活動がいかに外部に働きかけているのかの解明と共に、活動を行う中で、いかにして表現者側が変容してきたのか、というような表現者と外部社会との相互作用を見据えていくことは大きな課題である。特に、本研究でも述べてきたように、負を負のままに自己規定し表現していく実践が当事者の活動である本フィールドの実践にて展開されるが、そこに至るまでの過程には、K-BOX やこわれ者の祭典のメンバーである表現者に様々な葛藤や経験が存在してきたことが想定され、それらを包括的に捉えた分析が求められる。

3点目、本稿では、新たな当事者のつながりを形成するための戦略を提示しているものの、表現者に普遍的に共有されているものではない可能性も高く、より包括的な検討が求

められる。本研究は表現活動の一端を特定の切り口からみたものであり、本研究で表された戦略もまた表現活動でなされている戦略の一部を示しているにすぎない。

本研究フィールドは、病気や障害の当事者が行う活動ながら、福祉的な観点にとどまらない多様な要素を持つものであり、当事者による活動の豊かさを示しているものである。多様な観点での考察が可能であり、本活動を包括的にとらえ、かつより明瞭な分析の視点を踏まえ、考察を深めることで、理論的な普遍性を有する当事者の戦略、そこに潜む信念の理解を深めることができると思われる。本研究ではいくつかの戦略を示してきたが、それらの相互関係や、本研究でも言及した「生存」のような、実践に通底しうる概念の元での理論的な実践の検討が求められる。そうした分析を通して、理論的な知見を深めることで、当事者間、当事者—非当事者の対立や権力関係などの問題を含む状況がある中、誰もが当事者性を有する「生きづらさ」を生きていく上で有用な、自己規定や他者との共存のあり方に対する示唆が得られると考えられる。

謝辞

調査にご協力くださいました表現者の方々ならびに関係者の方々に深く感謝いたします。また、本論文の作成にあたっては査読者の方々から大変有益なご指摘をいただきました。本研究は科研費 23720433 の助成を受けたものです。感謝いたします。

注

- 1 なお、身体障害を有するメンバーである脳性マヒブラザーズは2012年のイベント10周年を機に「卒業」という形でこわれ者の祭典のメンバーではなくなり、卒業をテーマにしたこわれ者の祭典「さようなら！がんばれ！脳性マヒブラザーズ」（2012年9月22日）が催された。しかしながら、本研究のフィールドワークの多くは、脳性マヒブラザーズの在籍していた時期になされていたものとなっており、本稿の記述にも脳性マヒブラザーズの活動も含まれている。
- 2 こわれ者の祭典は、新潟公演においてはフリーアナウンサーの松井さんと、新潟を拠点として活動するお笑い集団NAMARA代表の江口さんが務めている。
- 3 著名人のゲストとしては、たとえば、月乃さんの著書においても次のように紹介されている。「中島らも、加護亜依、さかもと未明、雨宮処凛、戸川純、ハヤブサ選手、ホーキング青山、湯浅誠、田代まさし、小田原ドラゴン、かつらボクサー小口選手、香山リカ、田口ランディ、遠藤ミチロウ、西原理恵子、赤木智弘、福島泰樹、東ちづる、大槻ケンヂ、細川紹々ら多くの皆様にイベント出演をしていただいた（月乃2011b：184）」
- 4 通信制高校サポート校への校歌の提供、長岡市民活動まつり（2011年）、ひきこもりART FORUM はじめの一步展（2012年）テーマソング提供などをK-BOXは行っている。

文献

雨宮処凛・萱野稔人,2008,『「生きづらさ」について—貧困、アイデンティティ、ナショナルリズム』光文社.

綾屋紗月・熊谷晋一郎,2010,『つながりの作法：同じでもなく 違うでもなく』NHK 出版.

Certeau, M. D.,1980,Art De Faire, Union générale d'éditions,Paris.(=1987,山田登世子訳『日常実践のポイエティック』国文社.)

Evans,K.,Sullivan,J.M.,1995,Treating Addicted Survivors of Trauma. Guilford Press. New York. (=2007, 斎藤学監訳『虐待サバイバーとアディクション』金剛出版.)

Freidson,E.,1970,Professional Dominance: The Social Structure of Medical Care, Atherton Press. New Brunswick.(=1992,進藤雄三・宝月誠・佐竹久男訳『医療と専門家支配』恒星社厚生閣.)

藤野友紀,2007,「『支援』研究のはじまりにあたって：生きづらさと障害の起源」子ども発達臨床研究,1,pp.45-51.

Herman,J.,L., 1992, Trauma and Recovery, HarperCollins Publishers, New York(=1999, 中井久夫訳,『心的外傷と回復<増補版>』みすず書房.)

平野かよ子,1995,『セルフ・ヘルプグループによる回復：アルコール依存症を例として』川島書店.

星加良司,2012,「当事者をめぐる揺らぎ」『支援 Vol.2』,pp.10-28.

Illich,I.,1979, Limits to Medicine: Medical Nemesis: The Expropriation of Health, London: Calder & Boyars Ltd.London. (=1998, 金子嗣郎訳『脱病院化社会：医療の限界』晶文社.)

自立生活センター協議会編,2001,『自立生活運動と障害文化—当事者からの福祉論』現代書館.

小池誠,2012,「書評 つながりの文化人類学」文化人類学,77 (2) ,pp.334-337.

金子郁容・玉村雅敏・宮垣元編,2009,『コミュニティ科学』勁草書房.

Katz,A.,H., 1993, Self Help in America: A Social Movement Perspective,Twayne Publishers. New York. (=1997, 久保絃章訳『セルフヘルプ・グループ』岩崎学術出版社.)

香山リカ・上野千鶴子・嶋根克己,2010,『「生きづらさ」の時代』専修大学出版局.

木村晴美・市田泰弘,1996,「ろう文化宣言：言語的少数者としてのろう者」『現代思想』24(5):.pp.8-17.

- 倉本智明,2010,「文化と表現の障害学にむけて」倉本智明編著『手招くフリーク：文化と表現の障害学』生活書院. pp.9-17.
- 松岡正剛,2005,『フラジャイル：弱さからの出発』筑摩書房.
- 向谷地生良,2009,『技法以前：べてるの家のつくりかた』医学書院.
- 中村雄二郎・金子郁容,1999,『弱さ：21世紀へのキーワード』岩波書店.
- 中西正司・上野千鶴子,2003,『当事者主権』岩波書店.
- 西倉実季,2010,「『異形』から『美』へポジティブ・エクスポージャーの試み」倉本智明編著『手招くフリーク：文化と表現の障害学』生活書院. pp.77-101.
- 大串正樹,2007,『ナレッジマネジメント：創造的な活道管理のための12章』医学書院.
- Polanyi,M.,1966, The Tacit Dimension, Doubleday. New York (=2003, 高橋勇夫訳『暗黙知の次元』筑摩書房)
- 杉野昭博,1997,「『障害の文化』と『共生』の課題」『岩波講座文化人類学第8巻異文化の共存』岩波書店 .pp.247-274.
- 豊田正弘,1998,「当事者幻想論」『現代思想』26(2). pp.100-113.
- 月乃光司,2006,「詩集『仲間』」1000 番出版.
- 月乃光司,2009,『心晴れたり曇ったり』新潟日報事業社.
- 月乃光司,2011a,「『江口歩』は何者か」江口歩『エグチズム：新潟お笑い疾風録 NAMARA の素』新潟日報事業社 .p.88.
- 月乃光司,2011b,『人生は終わったと思っていた：アルコール依存症からの脱出』朱鷺新書.
- 山田富秋,1999,「障害学から見た精神障害：精神障害の社会学」石川准,
- 長瀬修編『障害学への招待：社会、文化、ディスアビリティ』明石書店. pp.285-311.
- 山下美紀,2010,「子ども研究への視座：『生きづらさ』概念と生活システム論の検討」『ノートルダム清心女子大学紀要』45,pp.13-22.